

平原 2 号墳 平 原 遺 跡

福岡県宮若市芹田所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第 231 集

2 0 1 1

福岡県教育委員会

平原 2 号墳 平 原 遺 跡

福岡県宮若市芹田所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第 231 集

序

福岡県教育委員会では、県道室木下有木若宮線拡幅事業に伴い、宮若市芹田に所在する平原2号墳および平原遺跡の発掘調査を行ないました。

平原2号墳は、県道室木下有木若宮線建設時に発掘調査された平原1号墳の東側に隣接していた古墳で、当時からその存在が知られていました。今回の発掘調査によって、古墳時代終末の遠賀川流域の古墳の様相を考える上で貴重な資料を追加することができました。

平原遺跡は、九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査で掘立柱建物跡が検出された平原遺跡との関連が推測される場所でした。今回の発掘調査では顕著な遺構は確認されませんでしたが、当時の地形を知ることができました。

本書が文化財保護思想の普及および学術研究・生涯学習の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理・報告書作成に至る間に御協力・御助言いただきました関係諸機関や地元をはじめとする多くの方々に対しまして、記して深甚の謝意を表します。

平成23年3月31日

福岡県教育委員会教育長
杉 光 誠

例　言

- 1 本書は、県道室木下有木若宮線拡幅事業に伴い、平成 20 年度に福岡県教育委員会が実施した、平原 2 号墳および平原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び報告書作成は、福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行なった。空中写真の撮影は九州航空株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行なった。
- 4 本書に掲載した遺構図の作成は、小方良臣の協力を得て、木下修、佐々木隆彦、小田和利、調査担当者が行なった。
- 5 出土遺物の水洗、復元、実測、浄書作業は、浜田信也の指導の下、九州歴史資料館及び福岡県文化財保護課太宰府事務所で行なった。
- 6 出土遺物及び図面・写真等の記録類は全て、九州歴史資料館において保管する。
- 7 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図を改変したものである。また、本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
- 8 本書の執筆、編集は今井涼子が行なった。

本文目次

第1章 はじめに	1
I 調査に至る経緯	1
II 調査の組織	2
第2章 位置と環境	3
第3章 調査の内容	7
I 平原2号墳	7
1 遺跡の概要	7
2 遺構と遺物	7
II 平原遺跡	16
1 遺跡の概要	16
2 遺構と遺物	18
第4章 おわりに	20

図版目次

図版1 平原2号墳全景（空中写真）	
平原2号墳全景（西南から）	
図版2 平原2号墳石室入口	
平原2号墳羨道	
平原2号墳羨道遺物出土状況	
図版3 平原2号墳玄室奥壁	
平原2号墳玄室遺物出土状況	
平原2号墳 燃土坑	
図版4 平原2号墳出土遺物	
図版5 平原遺跡遠景（西から 平原2号墳を望む）	
平原遺跡全景（空中写真）	
図版6 平原遺跡遺物出土状況	
平原遺跡出土遺物	

挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡分布図	4
第 2 図	周辺地形図	5
第 3 図	平原 2 号墳周辺地形図	6
第 4 図	平原 2 号墳実測図	8
第 5 図	平原 2 号墳墳丘土層実測図①	10
第 6 図	平原 2 号墳墳丘土層実測図②	11
第 7 図	平原 2 号墳石室実測図	12
第 8 図	焼土坑実測図	14
第 9 図	平原 2 号墳出土遺物実測図	15
第 10 図	平原遺跡遺構配置図	17
第 11 図	平原遺跡土層実測図	18
第 12 図	平原遺跡出土遺物実測図	19

第1章 はじめに

I 調査に至る経緯

直方土木事務所道路建設課が県道室木下有木若宮線拡幅工事を計画し、文化財の所在について照会があった。県道室木下有木若宮線は、九州縦貫自動車道に沿って丘陵と平地を貫いて伸びているため、多くの遺跡が確認される可能性があった。

路線予定地を踏査したところ、丘陵上で古墳が1基確認された。この古墳は、県道室木下有木若宮線建設に際して発掘調査が実施された平原1号墳と共に確認された平原2号墳であることが判明した。

また、平地部分の試掘調査を、バックフォーを用いて平成19年6月16日に実施したところ、遺構が確認されたため、発掘調査を実施することとなった。九州縦貫自動車道建設時に発掘調査が実施された平原遺跡が広がっているものと推測されたため、遺跡名は平原遺跡とした。

丘陵上で確認した平原2号墳から調査に着手することにし、平成20年7月22日に調査予定地を確認し、引き続いで杭打ちおよびレベル移動を行なった。古墳周辺の地形測量を7月30・31日に実施し、8月4日から作業員による掘削を開始した。古墳周辺の表土剥ぎから始め、6日にトレンチを設定して周溝の存在を確認した。周溝の掘削と並行して、石室内に溜まった土砂の除去に着手した。9月25日に空中写真撮影を行ない、実測作業を経て、11月11日に石室とトレンチの埋め戻しを終え、発掘調査を終了した。

平原遺跡は、平原2号墳の作業と並行して9月16日に重機による表土剥ぎ作業を開始した。10月15日に空中写真を撮影し、平板実測を行なった後に埋め戻して、反転。11月14日に反転部の空中写真を撮影後、平板実測を行ない、調査を終了した。

11月17日に発掘機材、25日に建機の撤収を行ない、本調査に係る作業を完了した。



見学風景

II 調査の組織

平成 19・20・22 年度の発掘調査関係者は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 22 年度
総括			
教育長	森山 良一	森山 良一	杉光 誠
教育次長	橘崎 洋二郎	橘崎 洋二郎	荒巻 俊彦
総務部長	大島 和寛	荒巻 俊彦	今田 義雄
副理事兼文化財保護課長	磯村 幸男	磯村 幸男	
文化財保護課長			平川 昌弘
副課長	佐々木隆彦	池邊 元明	伊崎 俊秋
参事	新原 正典	新原 正典	
参事兼課長技術補佐	池邊 元明	小池 史哲	小池 史哲
同	小池 史哲	伊崎 俊秋	
参事	伊崎 俊秋		
参事兼課長補佐	中瀬 宏		
課長補佐		前原 俊史	日高 公徳
参事補佐	濱田 信也		
同	副島 邦弘		
庶務			
管理係長	井手 優二	富永 育夫	富永 育夫
事務主査			藤木 豊
主任主事	潤上 大輔	藤木 豊	
同	柏村 正央	近藤 一崇	近藤 一崇
同	小宮 辰之	小宮 辰之	内山 礼衣
主事	野田 雅	野田 雅	仲野 洋輔
調査・報告			
参事補佐兼調査第一係長	小田 和利	小田 和利	
調査第一係長			吉村 靖徳
主任技師	岡寺 未幾 (試掘調査担当)	今井涼子 (発掘調査担当)	
文化財保護係技術主査			今井涼子 (報告書担当)

第2章 位置と環境

平原2号墳および平原遺跡が所在する宮若市は、平成18（2006）年2月11日に宮田町と若宮町が合併して誕生した。市の西部から南部に三郡山系の山々がそびえ、犬鳴山（標高584m）に端を発し、八木山川、山口川、黒丸川、有木川などの流れを集めた犬鳴川が市の中央部を東流する。犬鳴川の流れに沿って、およそ南東から北西方向へ盆地が開けている。

宮若市域で最も古い遺物が認められた遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての複合遺跡である汐井掛遺跡である。ナイフ形石器、細石刃、縦長薄片などが採集されている。

縄文海進により、遠賀川の下流から中流域は「古遠賀湊」と呼ばれる内湾となり、犬鳴川中流域も湖沼状態であった。この時期の遺跡としては、縄文時代後期末から晩期初頭の土器を含む土坑が検出された都地遺跡、夜白式の埋甕遺構が確認された横田遺跡がある。また、前述の汐井掛遺跡から縄文時代の石鎚が多く採集されている。

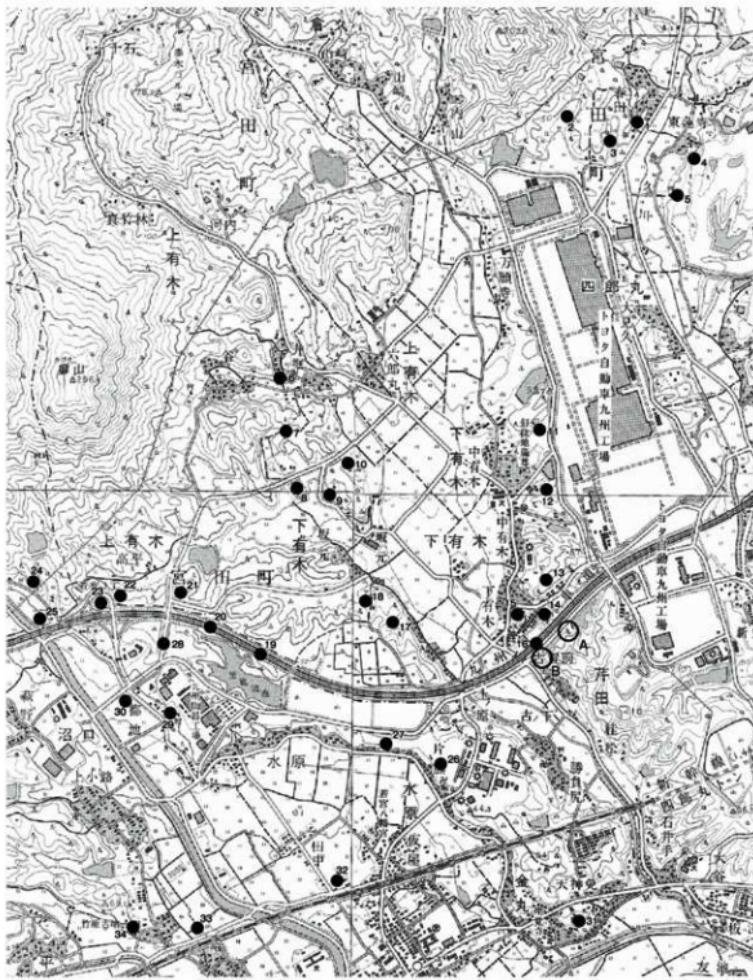
弥生時代早期の遺跡は未確認だが、前期に入ると山口川、黒丸川流域の段丘上に集落が展開する。中期に入ると遺跡数は増加、分布範囲も拡大し、犬鳴川流域にも集落が展開する。弥生時代の全期間を通じて集落が営まれたのは西ノ浦遺跡と中遺跡群である。特に中遺跡群は広範囲に集落が継続し、拠点集落といえる様相を示すが、墳墓は不明確である。また、後期の汐井掛遺跡に出現する、副葬品を有する墳墓を含む大規模な墳墓群は、有力な集落の存在を示しているが確認されていない。

古墳時代には丘陵上に500基にのぼると推定される古墳が築造された。そのほとんどは6世紀後半から7世紀始めにかけての群集墳である。弥生時代終末期に他地域を圧倒する内容を見せた汐井掛墳墓群と入れ替わるように出現した高山剣塚古墳（前方後円墳）のほか、三段築成の墳丘と竪穴系横口式石室をもつ八幡塚古墳、装飾をもつ竹原古墳（国指定史跡）、損ヶ熊古墳（県指定）などの首長墓がある。古墳の数に比して、確認された集落跡は少なく、立地は丘陵裾部に移動している。咲花遺跡、柳ヶ谷遺跡、都地原遺跡、中遺跡群前田遺跡、下原遺跡などがある。

奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡が検出された遺跡には、下遺跡群小倉遺跡、金生遺跡群門田遺跡、原田遺跡群三月田遺跡・懇蓮寺遺跡、平原遺跡、都地遺跡がある。いずれも建替えはなく、その機能が短命であったと推測される。

「和名類聚抄」に登場する宮若市域の地名は、筑前国鞍手郡粥田（加都多）郷（鶴田、龍徳、本城）、生美郷（宮田、長井鶴、上大隈、磯光）、金生郷（金生、原田）、十市郷（山口、沼口、中村、福丸、水原、金丸）である。また、宗像郡に荒木郷があるが、これは有木郷、すなわち現在の上有木、下有木をさすのではないかとされている。

平安時代以降荘園化が進み、宮若市域では粥田荘（成勝寺領のち高野山金剛三昧院領）、若宮荘（宗像大社領）、金生荘（東大寺領のち若宮荘）などが成立する。平原2号墳・平原遺跡が所在する芹田の史料上の初見は、文和2（1353）年、宗像大宮司氏俊が多々良川合戦の勳功の賞として稻光と共に押領したことを示す足利義詮下文である。



- | | | | |
|-----------|-------------|-------------|------------|
| A 平原 2 号墳 | 8 向烟古墳群 | 17 桶田古墳 | 26 片ノ熊古墳群 |
| B 平原遺跡 | 9 神田古墳 | 18 板元古墳群 | 27 八板平古墳 |
| 1 下春田古墳群 | 10 四ツ塚古墳 | 19 柳ヶ谷遺跡 | 28 都地遺跡 |
| 2 窟底古墳群 | 11 中有木中ノ浦古墳 | 20 都地原遺跡 | 29 都地八幡經遺跡 |
| 3 松ヶ元古墳群 | 12 南ヶ浦古墳群 | 21 天神ノ上古墳群 | 30 北田遺跡 |
| 4 宮崎窓跡 | 13 下有木北古墳群 | 22 高平 A 古墳群 | 31 金丸古墳 |
| 5 春日神社裏古墳 | 14 下有木古墳群 | 23 沙井掛遺跡 | 32 山尻遺跡 |
| 6 井堀古墳 | 15 山王神社古墳群 | 24 高平 B 古墳群 | 33 八幡塚古墳 |
| 7 百坂古墳群 | 16 平原遺跡 | 25 咲花遺跡 | 34 竹原遺跡 |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

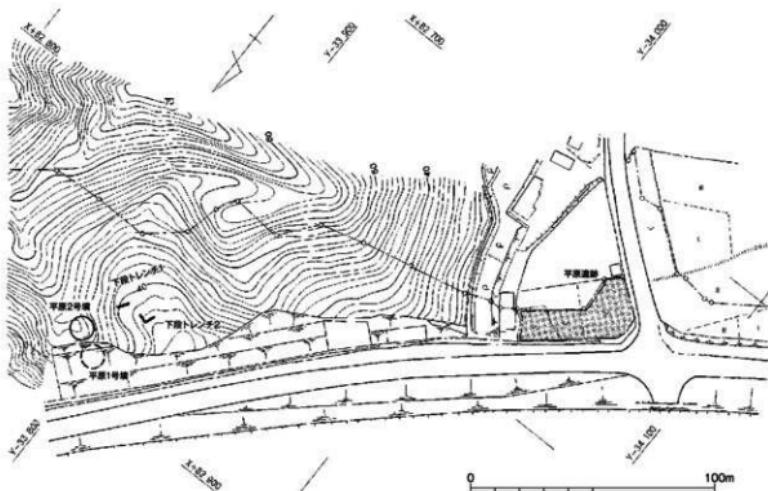
室町時代後期の筑前国は、少弐氏と大内氏の対立に大友氏の進出が加わり、めまぐるしく情勢が変化する。宮若市域は少弐氏の後退後大内氏の勢力範囲となり、大友方と激しく対立する。そのため、宗像氏や杉氏によって龍ヶ岳城、笠木城、稻光城、草場城を始めとする多くの山城が築かれた。

小早川氏の支配を経て、慶長5（1600）年黒田長政が名島城に入城する。元和9（1623）年、福岡藩の支藩である東蓮寺藩（延宝3（1675）年直方藩と改称）が成立し、宮若市域の一部が藩領となった。享保5（1720）年の直方藩廃絶以後は本藩の支配を受ける。以後、明治初めまでは、水田と周囲の山林を資源として形成された農村だった。

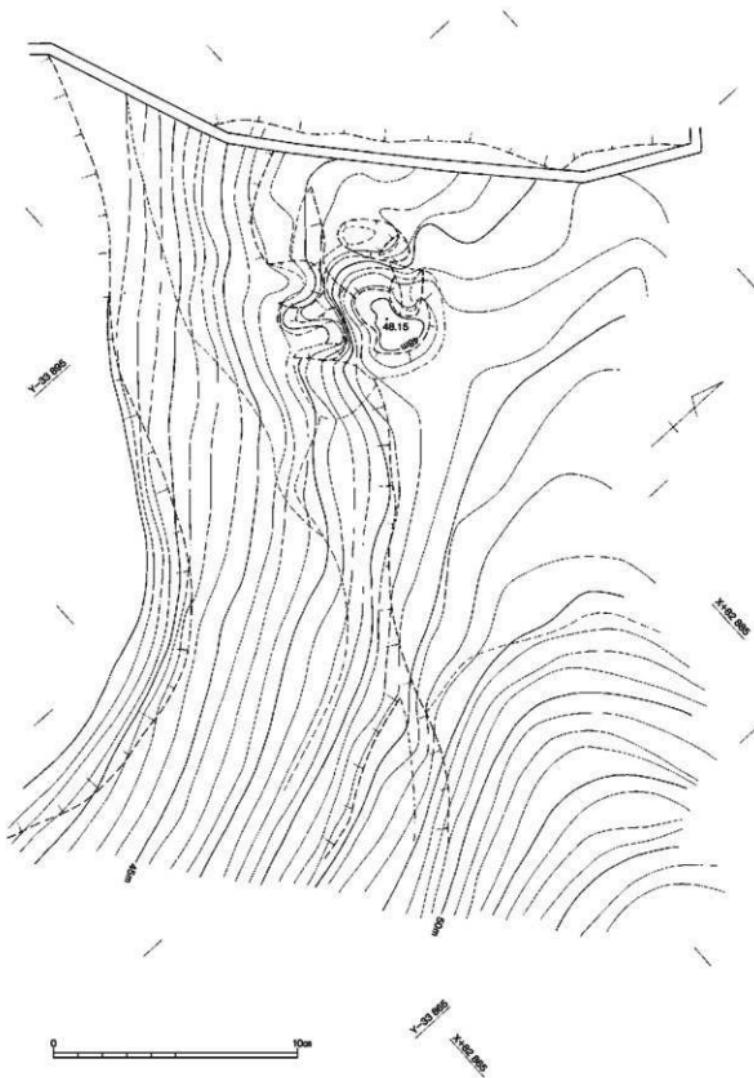
明治17（1884）年に貝島太助が大ノ浦炭礦を開いたことから、旧宮田町域の石炭採掘が本格化する。炭鉱開発の進展に伴い鉄道の整備も進み、明治35（1902）年に国鉄宮田線、同37（1904）年に国鉄菅牟田線が開通。昭和2（1927）年には貝島専用鉄道が敷設された。昭和39（1964）年頃に最盛期を迎えるが、石炭業の不振に伴い、昭和51（1976）年の貝島炭礦閉山と共に炭鉱まちとしての歴史を終えた。その後は、自動車産業やI C産業等の企業立地の実現により、新たな基幹産業の時代へと入っている。旧若宮町域は、炭鉱開発などではなく、農業を基幹産業とする純農村地域として現在に至る。

参考文献　「宮田町誌」上巻 宮田町誌編纂委員会 1964

「若宮町誌」上巻 若宮町誌編さん委員会 2005



第2図 周辺地形図（1/2,000）



第3図 平原 2号墳周辺地形図 (1/200)

第3章 調査の内容

I 平原2号墳

1 遺跡の概要

平原2号墳は、宮若市芹田376-1に所在する。調査面積は200m²である。

芹田農前坊(標高112m)から北へ派生する丘陵の先端部に位置し、標高は約47mである。県道室木下有木若宮線建設時に発見され、発掘調査が行なわれた平原1号墳(調査後消滅)の東側に隣接していた。

平原2号墳は墳丘に数ヶ所擾乱が見られ、盜掘口と思われる穴が南側斜面に開いており、石材の一部が確認できる状態であった。このため、天井石は失われ、玄室の一部だけが残存しているものと予測された。ところが意外にも、土砂を除去すると羨道の天井石が現れ、盜掘坑は玄室の前面部分を破壊したに留まり、予測よりも良好な状態で石室が残存していることが明らかになった。また、斜面にはかなり厚く土砂が堆積し、羨道、幕道も完全に埋没していた。

石室内の堆積土中からの遺物の出土はなかったが、羨道部に堆積していた黒色土からは須恵器片が多く出土し、統いて耳環(第9図17・18)が出土した。石室内は擾乱されていたが、玄室と羨道から供獻された土器が出土した。

2 遺構と遺物

墳丘

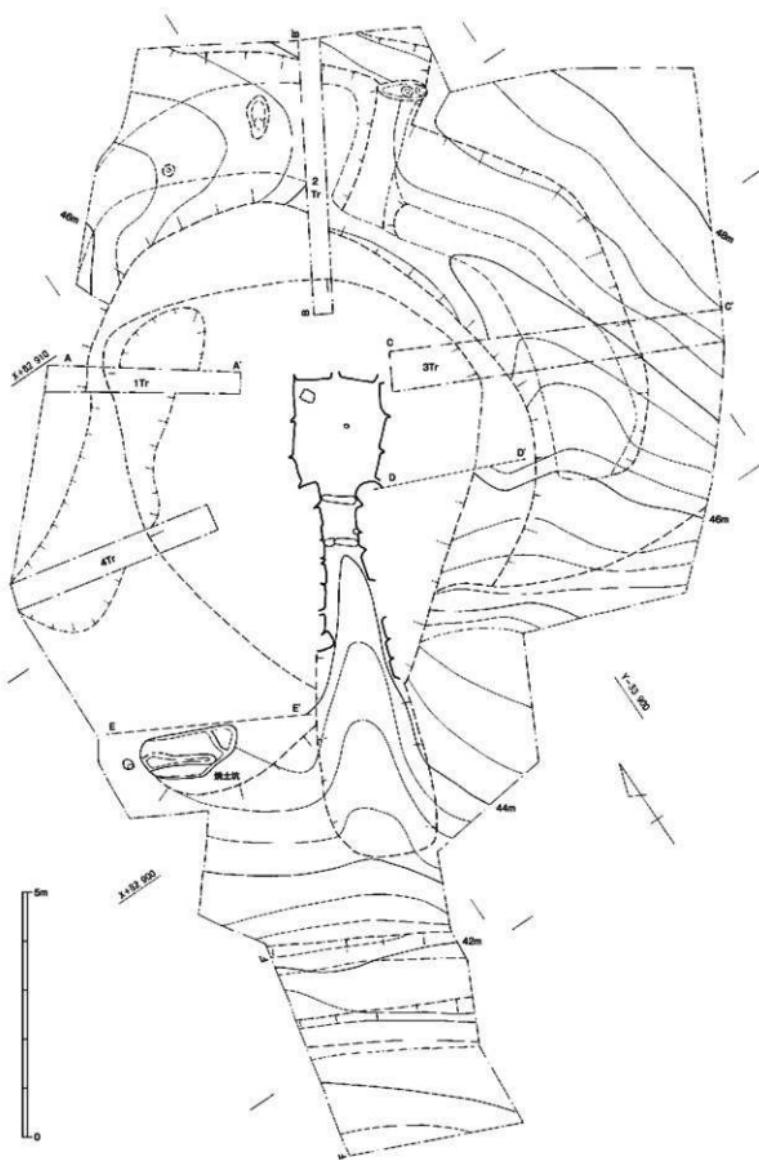
ほぼ東西にのびる丘陵鞍部に構築された円墳である。直径は約10m、羨道入口から墳頂までの高さは4mを測る。

周溝は北西側が失われているが、南東側の状況から、墳丘背面側の周囲およそ1/2を巡ると思われる。石室の背面付近が橋状に、幅0.7mほど掘り残されている。また、周溝底面に、暗灰褐色土を埋土とするピットを3基検出したが、機能は不明である。

墳丘の状況および周溝を確認するために4本のトレーンチを設定し、5箇所で土層を観察した。順に状況を説明する。

1トレーンチ(A-A' 第5図)

石室中心から5mの位置で石室掘方を確認できる。掘方内は10~20cm厚さに粘質土を積んでいる。掘方の肩から石室中心方向へ2mのところに花崗岩があり、この付近から土の積み方が変化する。ハ層は、淡橙褐色粘質土を主体とする粘質土が10cm厚さに積まれている。花崗岩は土留めであろうか。ロ層は一見、橙褐色粘質土が10cm厚さで積まれているように見えるが、よく観察すると3~6cm厚さの層が確認でき、非常に丁寧に土を積んでいることがわかる。砂質土は用いていない。イ層は再び、層の厚みが10cm程度になる。第3層は周溝の埋土である。



第4図 平原2号墳実測図 (1/100)

2トレンチ（B - B' 第5図）

石室中心から3mの位置で石室掘方を確認できる。掘方内は5~20cmの厚さに赤褐色または橙褐色の粘質土が積まれている。木の根の影響ではっきりしないが、下層は層の厚みが10~20cmと厚く、その上に5cm厚ほどの層が積まれ、再び10cmほどの厚みとなるようで、1トレンチほど顕著ではないが、同様の様子が確認できる。

周溝は灰褐色土ないし黒褐色土を埋土とし、幅2.45m、深さは0.2mを測る。

3トレンチ（C - C' 第5図）

石室中心から3mの位置で石室掘方を確認でき、1トレンチ同様、掘方内は大きく三層に分けることができる。ハ層は厚みが20cmほどと厚いが、その上の口層は厚さ5~10cmの層でよく締まり、花崗岩バイラン土が多く混じる層と粘質土層の互層になっている。イ層は再び層の厚みが増しているのがわかる。

周溝は幅が2.85m、深さ0.55mを測る。埋土は灰褐色土、黒褐色土である。

墳丘東側土層（D - D' 第6図）

石室中心から3mの位置で石室掘方を確認できる。掘方内はやはり、大きく三層に分けられる。下層と上層が10cm程度の厚みの粘質土の層で、中層は3~5cm厚の花崗岩バイラン土混じりの層と粘質土層の互層となっている。

墳丘西側土層（E - E' 第6図）

石室掘方は確認できない。地山上の旧堆積層に切り込む浅い溝または土坑の上に墳丘を築造していることがわかる。この墳丘西側土層を確認した地点のすぐ手前に焼土坑を検出しており、浅い溝または土坑はこれと関連する可能性がある。

主体部

石室（図版3、第7図）

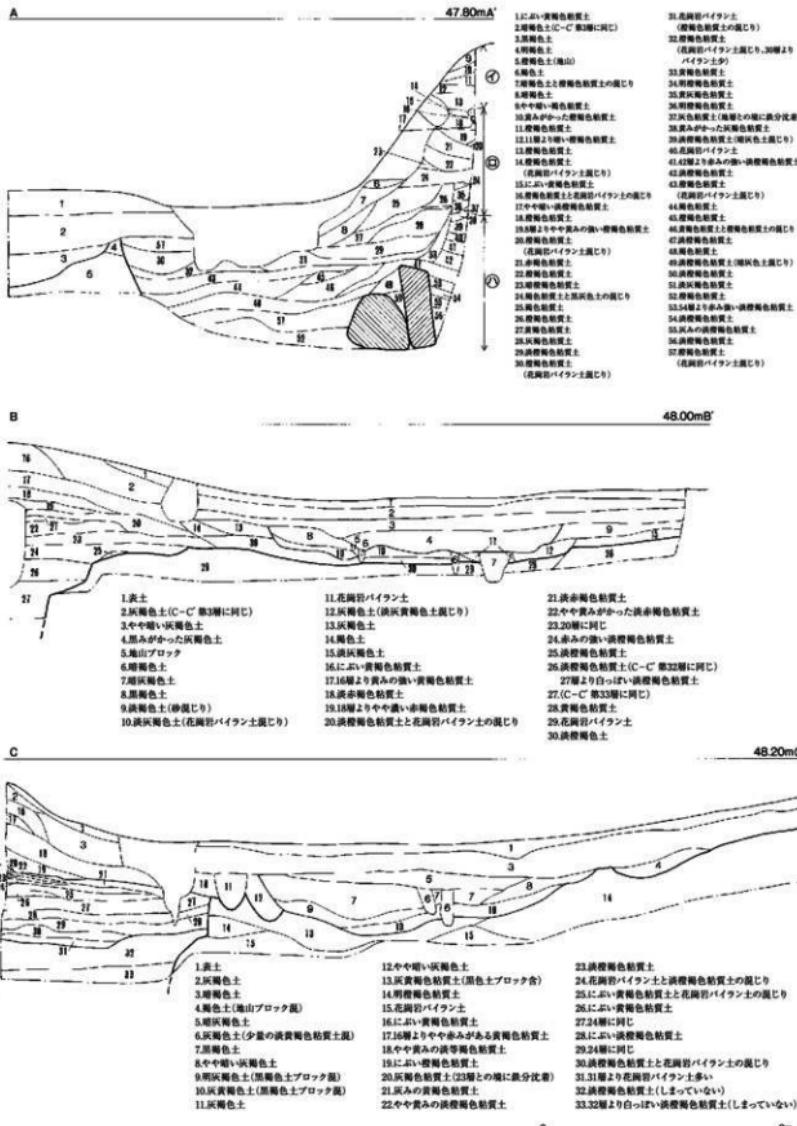
石室は単室構造の横穴式石室で、主軸はN-29°-Eとし、西南方向に開口している。

玄室の規模は2.1m×1.9mで、平面形は玄室入口側がやや幅狭い逆台形を呈している。天井高は2.2mで、持ち送る。持ち送りの様子から、天井石は残存する一石のみであろう。

奥壁および側壁には一段目に比較的大きな石材を用いているが、二段目以上に用いられている石材は大きさ、形状とも不ぞろいである。花崗岩を主体に用いている。

床面近くでこぶし大の円礫を多く確認しており、床に敷かれていたと推測されるが、原位置を保っているものはほとんどなく、盜掘時に荒らされたものと思われる。

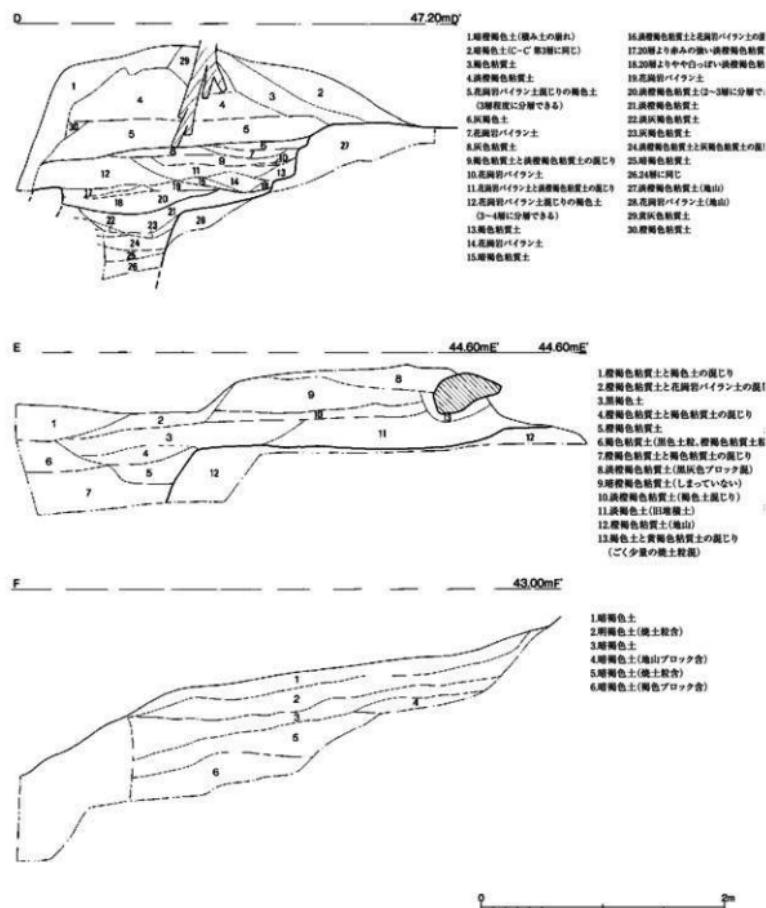
袖石の間に平たい石をたてて框石としている。閉塞の状況は不明。



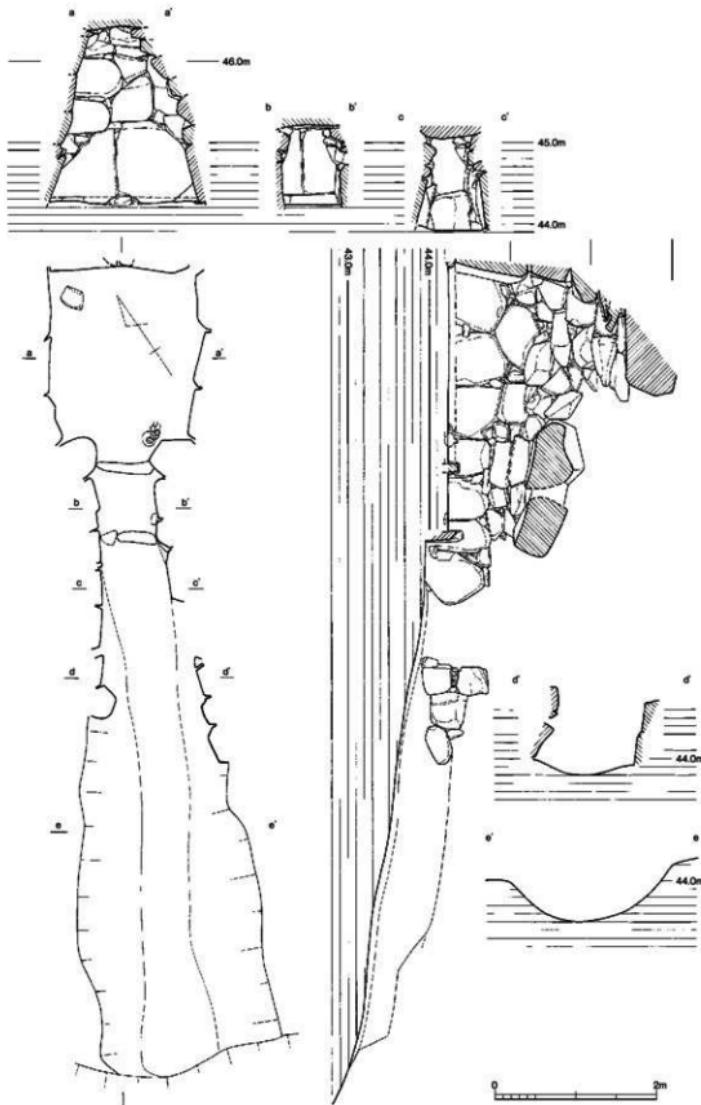
第5圖 平原2号墳土層害測圖① (1/40)

羨道・墓道(図版2、第6・7図)

玄門から0.75mの位置に框石状に石を立て、前室様に羨道を区切った空間がある。平面形は玄室同様、入口側の幅がやや狭い逆台形を呈している。天井高は1.0mを測り、入口の方が低い。玄室同様、一段目に最も大きな石材を用いている。前室を強く意識しており、前室と同様の機能を果たしていたと思われる。



第6図 平原2号墳土層実測図② (1/40)



第7図 平原2号墳石室実測図 (1/60)

羨道は前室様の区画の入口から 3.3 m、その先に素掘りの墓道が 3.25 m 続いている。ここで、大きく地形が下がる。本来、なだらかな斜面であったものを、後世に段造成したと考え、墓道の続きを確認しようと調査区を拡張した。堆積土を除去し、地山面を検出したところ、幅 1 m の狭いテラス状の平坦面が現れたが、墓道の痕跡は確認できなかった。テラス下の斜面は短いものの急で上りにくく、これが古墳築造当初の地形であれば階段状に成形されていてもよいと思われるが、そうした痕跡は認められなかつた。

堆積土中に少量ではあるが焼土塊を含む土層があることが注意をひいた。段上で焼土坑を検出しているが、これは古墳築造以前のもので直接は関係しない。検出した他にも焼土坑等の遺構があり、改変を受ける際に破壊されたのであろうか。

調査区を拡張した斜面の下の平坦面にトレーニチを設定して、やはり墓道の痕跡が認められないか確認した。地山直上に黒灰色土、その上に灰褐色土が堆積しており、この層から近世以降の陶磁器片が出土した。下段トレーニチ 1 の中央付近に階段状のごく浅い段を検出したが、他の場所にはこのような成形はみられず、性格は不明である。

調査区拡張部分、下段トレーニチの状況から、近世以降に大きな地形の改変を受けていると思われる。

羨道および墓道の床面近くには黒色土が厚く堆積しており、多くの須恵器片を包含していた。また、人頭大の礫も多くあり、玄室を構成していた石材の一部や閉塞石と思われる。



下段トレーニチ 1

焼土坑（図版 3、第 8 図）

墳丘東側土層確認のため墳丘を断ち割ったところ、検出した。平面形は、長径 1.95 m、短径 0.9 m の長楕円形を呈する。深さは 0.1 ~ 0.15 m。土坑の両端部分に焼土と炭の広がりを確認した。底面の一部は溝状に窪み、炭化物と灰が詰まっていた。土坑の床面、壁面は焼けておらず、繰り返し火が用いられた痕跡はない。

焼土坑の東側に直径 18cm のピットがあり、これにも焼土と炭が詰まっていた。

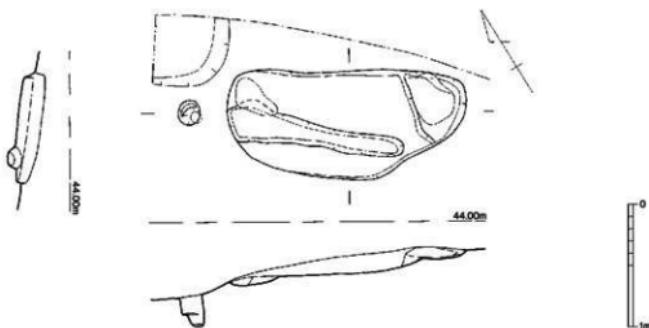
先述したとおり、墓道の延長線上の斜面にも焼土塊を含む土層の堆積が確認されており、何らかの関連があるものと思われるが、性格は不明である。

出土遺物（第 9 図）

土器

玄室（図版 4、第 9 図）

玄室南隅から須恵器高杯、平瓶、土師器杯蓋が出土した。高杯は脚部を上にし、杯部を平



第8図 焼土坑実測図 (1/40)

瓶につけた状態であった。これらは追葬の際に隅に片づけられたと考えられ、盗掘の影響は受けていないと思われる。他に遺物は出土しなかった。

1は完形の高杯である。体部外面に沈線を一条巡らす。杯部の口縁部および体部は内外面ともヨコナデ調整。底部外面は回転ヘラ削り後に一部ヨコナデ。内面はナデ調整。脚部は内外面ともナデ調整で、シボリ痕が顕著に残る。精良な胎土で、硬質に焼成している。杯部口径 10.1cm、脚部径 6.1cm、器高 7.3cm。

2は平底で半球形の体部をもつ完形の平瓶である。口縁端部をわずかに内彎させ、内外面ともヨコナデし、外面にはカキ目を施し、口縁下に浅い沈線を一条巡らす。体部外面は全体にカキ目を施す。体部と底部の境付近にヘラ削りの痕跡が残る。底部外面はナデ調整。胎土は精良で、硬質に焼成している。口径は 6.2cm、底径 10.2cm。

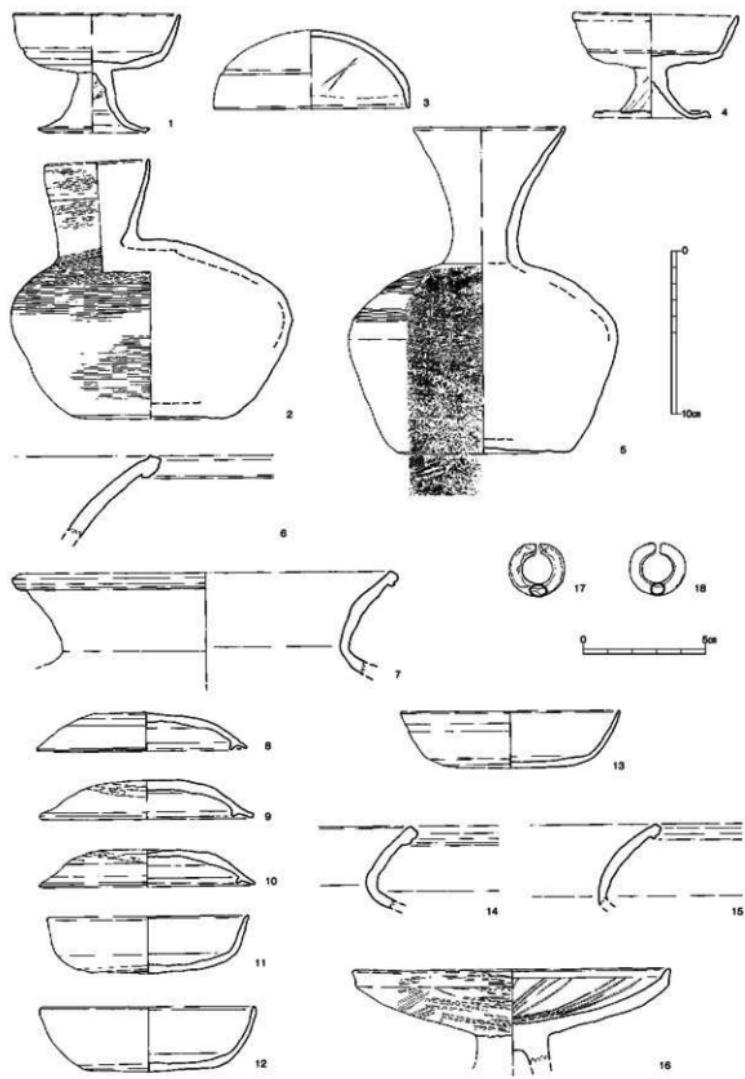
3の杯蓋は体部外面に沈線を一条巡らし、口縁部下に僅かに段をもつ。内外面とも摩滅により調整不明だが、内面に僅かに工具痕が残る。焼成はよい。3/4ほどが残存し、復元口径 11.8cm、器高 4.8cm。

羨道・墓道(図版4、第9図)

4・5は前室様に区切られた区画から出土した須恵器である。高杯は、玄室框石の際から転倒した状態で出土したが、原位置ではない。

4は脚部の一部を欠く高杯。杯部の体部は直線的に立ち上がる。杯部の体部は内外面ともヨコナデ調整、底部外面もヨコナデ調整、底部内面はナデ調整する。脚部はヨコナデ調整でシボリ痕が残るが、基部外面はナデ調整で仕上げる。脚部に僅かだが灰が被っている。胎土は精良で、硬質に焼成している。口径 9.9cm、脚部径 7.1cm、器高 6.4cm。

5は素口縁の長頸壺で、口縁部は僅かしか残存していない。口縁部、頸部は内外面ともヨコナデ調整。体部はナデ調整後に、上半にカキ目を施す。肩部にヘラ記号がある。また、



第9図 平原2号墳出土遺物実測図 (1/3、17・18は1/2)

部分的に灰が被っている。底部外面もナデ調整。胎土は精良で、硬質に焼成している。復元口径 9.1cm、底径 10.5cm、器高 20.0cm。

6・7は漢道部から出土した須恵器甕である。口縁を外に折り返して厚く整え、内外面ともヨコナデ調整する。胎土は精良で、焼成も良好。6は小片のため口径を知りえないが、7は口径 22.8cm に復元できる。

8～15は墓道に堆積していた黒色土中から出土した須恵器である。

8～10は返りをもつ杯蓋。口縁部はヨコナデ調整し、天井部内面はナデ調整する。8は天井部外面を回転ヘラ削りする。口径 12.6cm、器高 2.3cm。9の天井部外面は手持ちヘラ削り後、一部ナデ調整。口径 12.7cm、器高 2.35cm。10の天井部外面は手持ちヘラ削り後、一部ナデ調整。口径 13.0cm、器高 2.2cm。

11～13は須恵器杯。11は口縁端部を僅かに外反させる。体部は内外面ともナデ調整、底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整。口径 12.1cm、器高 3.5cm。12は体部が内彎気味に立ち上がる。体部内外面はヨコナデ調整、底部外面はヘラ削り後ナデ調整、内面はナデ調整。口径 12.0cm、底径 8.1cm、器高 4.0cm。13は体部が直線的に外方へ開く。体部は内外面ともヨコナデ調整、底部はヘラ削り後ナデ調整、内面はナデ調整。口径 13.4cm、底径 8.4cm、器高 3.5cm。

14・15は須恵器甕の口縁部片。口縁端部を折り返し、厚く仕上げる。小片のため口径を復元できない。14は口縁部内面に灰が被り判然としないが、内外面ともヨコナデ調整であろう。僅かに残る体部にタタキ痕が認められる。15は内外面ともヨコナデ調整で、外面に灰が被る。

16は調査区の表土除去中に出土した。土師器高杯の杯部である。口縁端部を摘みあげるように仕上げ、内面には暗文、外面にはヘラミガキを施す。脚部との境付近には工具痕が残る。脚部はナデ調整。焼成は良好。杯部口径 19.3cm。

金属製品（図版4、第9図）

17・18は金銅製耳輪である。墓道掘削中に、黒色土中から出土した。盗掘を受けた際に廃棄されたと思われる。どちらも腐食が進行して緑青が浮き、金色の残りはよくない。

II 平原遺跡

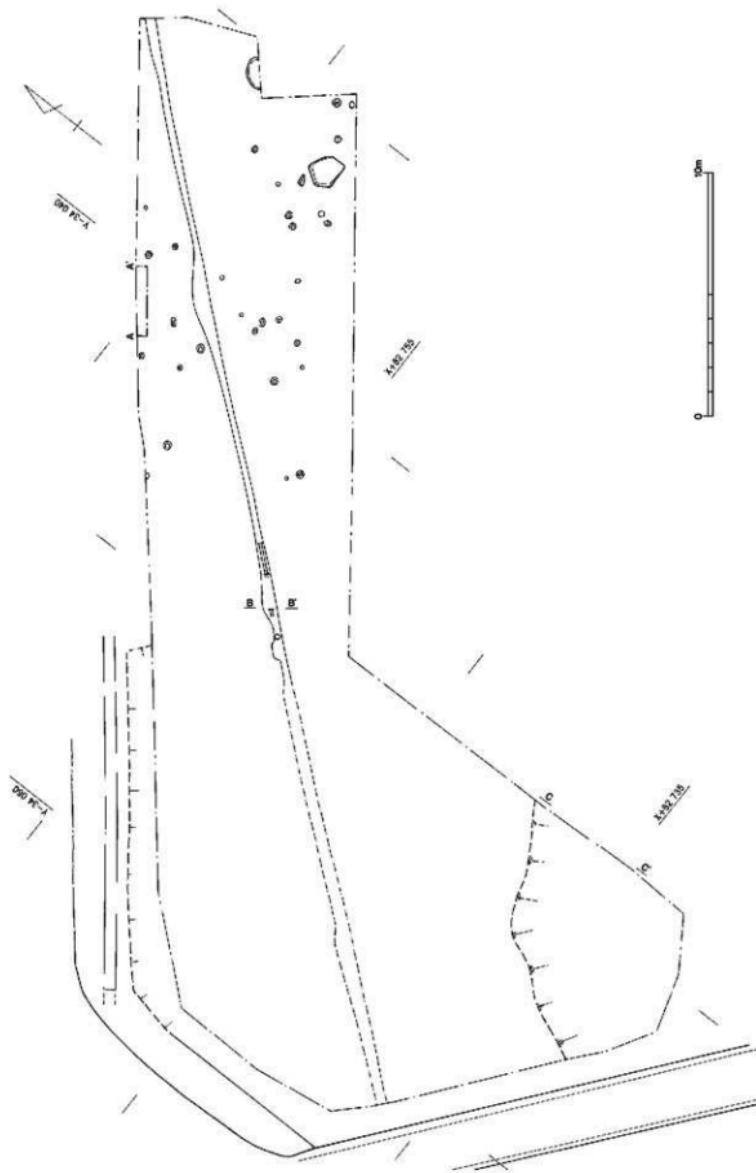
1 遺跡の概要

本遺跡は宮若市芹田字平原 413-2、414-1、415-3 に所在する。平原2号墳が所在する丘陵の西側の裾に位置し、標高は約 21.6 m である。調査面積は 380m² である。

九州縦貫自動車道建設時に発掘調査が行われた平原遺跡は、本遺跡から北東に 80 m ほど離れた標高およそ 30 m の丘陵裾の低段丘上に所在した。8世紀初頭と思われる掘立柱建物跡 2 棟が確認されていたので、本遺跡にも遺構が広がっていると推測された。

本遺跡は、調査区の北東隅から南隅に向かって緩やかに傾斜し、南隅から谷状地形になる。残念ながら顕著な遺構は検出できなかった。

第10図 平原道路遭難配置図 (1/200)



2 遺構と遺物

本遺跡ではピットが約30基検出できたが、埋土も深さもまちまちで、掘立柱建物跡になり得るものはなく、顕著な遺構は検出できなかった。

平原2号墳が所在する丘陵の西側裾部にあたり、緩やかに南西方向に傾斜し、調査区南隅からは谷状地形になる。

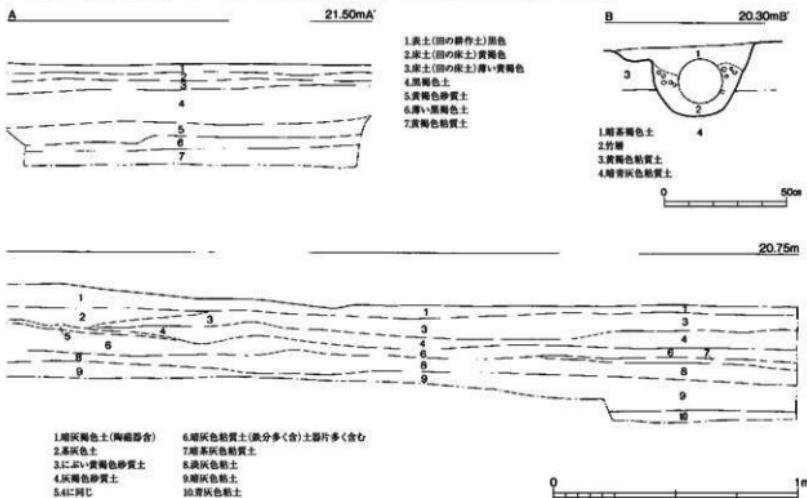
調査区のほぼ中央を暗渠が通っているが、古い水田の区画に伴うものと思われる。幅は20~60cm、深さはおよそ30cmである。湿抜きのためか、竹を敷き詰めた中に土管を据えている。

出土遺物（図版6、第12図）

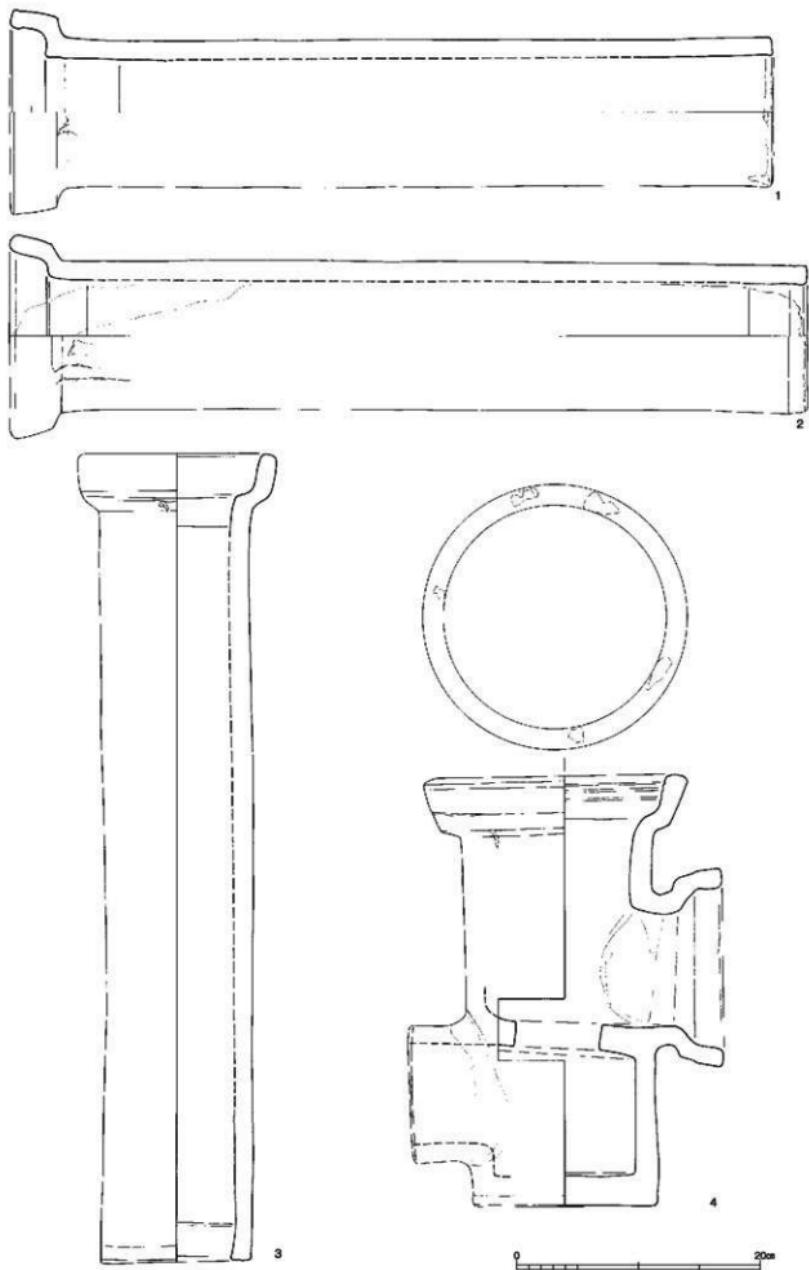
暗渠を検出した際、偶然土管の継ぎ手部分が確認できたので、継ぎ手を中心に周辺の土管を取り上げた。

1~3とも、内側の上下両端に型枠痕が認められる。また、粘土の貼合わせ痕が2か所残るものも共通する。1は素焼で、上部口径16.6cm、下部口径12.1cm、長さ62.8cm。2には釉が施されており、口縁下外面に工具痕と思われる痕跡がある。上部口径16.4cm、下部口径12.1cm、長さ65.6cm。3も釉が施されており、上部口径16.3cm、下部口径12.2cm、長さ66.3cmである。

4は継ぎ手部分で、粘土板の貼合わせ痕が2か所認められる。成形に型枠を利用したと思われる。下部は平底状で、上部口縁には目土跡が残る。また、口縁内部に沈線が2条巡る。全面に釉が施されている。上部口径21.0cm、底径14.9cm、高さ35.4cm。



第11図 平原遺跡土層実測図 (1/20・1/40)



第12図 平原遺跡出土遺物実測図(1/4)

第4章 おわりに

宮若市内の古墳は、その立地からいくつかのグループに分けられる。平原2号墳が属する有木川流域左岸グループは、有木川によって形成された平地を見下ろす西側斜面に、2基から7基ほどの小さな群を形成している。平原2号墳は、平原1号墳と共にグループの最南端に占地している。ともに南西方方向に開口しており、墓道を共有していた可能性が高いが、後世に地形の改変を受けており確認できない。

平原2号墳は、地山を掘り込んで石室を構築し、粘質土を中心に用いて丁寧に墳丘を築造している。墳丘は、土の積み方の違いから大きく三層に分けられ、最も細かく土を積んでいる中層=口層は玄室天井付近に相当する。石室掘方は、石室中心から3mの位置を基本とし、羨道入口部分は4.5mである。西側斜面が5mとなっているのは、傾斜が急で墳丘築造に用いる土量が多いためであろう。地形を巧みに利用しており、石室入口床面から墳頂までは4mを測るが、石室背面の橋状部分から墳頂まではわずか1mである。石室は一見複室構造のようだが、石室幅や天井高が変化しないことから、前室ではなく、羨道を区切って前室様の空間を作り出しているものとみている。石室の構造と出土遺物から、6世紀末から7世紀初頭に築造されたと思われる。また、玄室隅から出土した土器が転倒した状態であったことから、少なくとも一度は追葬が行なわれたと思われる。

有木川左岸グループでの古墳造営は、5世紀後半に築造された下有木1号墳を含む下有木古墳群の築造から開始され、5世紀末から6世紀初頭の下有木北古墳群、6世紀後半から末の中有木中ノ浦古墳へと続く。南ヶ浦古墳群は時期を示す遺物に恵まれていないが、複室構造の横穴式石室の円墳で構成されていることから、6世紀の築造であろう。山王神社古墳群の詳細は不明である。いずれにしても、6世紀末から7世紀初頭の平原古墳群の築造をもって、有木川左岸グループの古墳造営は終了する。埋葬主体に注目すると、5世紀後半に竪穴系横口式石室を採用する下有木1号墳が出現する一方で、下有木古墳群・下有木北古墳群のように6世紀まで箱式石棺を採用する古墳が残存する。中古木中ノ浦古墳群など、横穴式石室をもつ古墳の築造は6世紀後半である。この傾向は概ね宮若市域全体に見受けられ、有木川左岸グループは、若宮盆地では標準的な様相を示しているといえる。周辺では古墳時代の集落はまだ確認されておらず、造営集団は不明である。

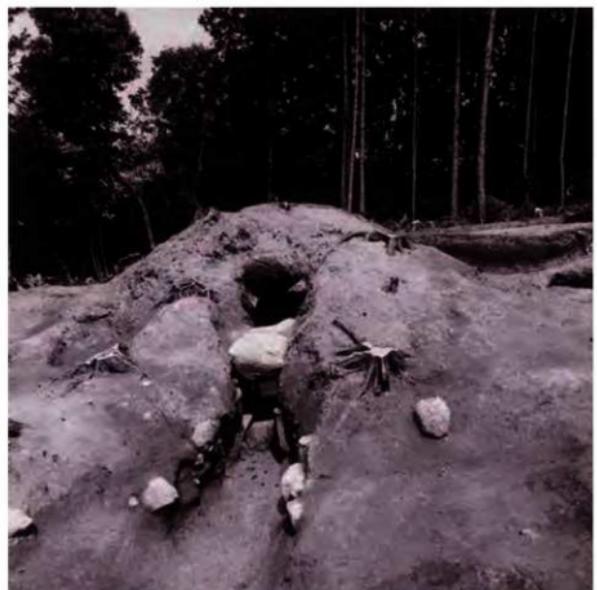
平原遺跡は残念ながら顕著な遺構は確認できなかった。平原遺跡から西側の県道拡幅用地の試掘調査では、表土、耕作土直下で青灰色粘質土が認められ、有木川を含む谷状地形であることが確認された。本報告の平原遺跡の位置が地形の変換点である。

古文書などによれば、若宮盆地は複数の莊園が成立する農村地帯で、平原遺跡周辺も室町時代には既に村落を形成している。当該時期の集落遺跡が存在するはずであるが、掘立柱建物跡が確認された平原遺跡（綾貫）は、平原遺跡（本報告）よりも10mほど標高が高い。集落遺跡は丘陵裾部あるいは河岸段丘上に展開すると思われる。

図 版



平原2号墳全景
(空中写真)



平原2号墳全景
(南東から)



平原 2 号墳石室入口



平原 2 号墳羨道



平原 2 号墳羨道
遺物出土状況



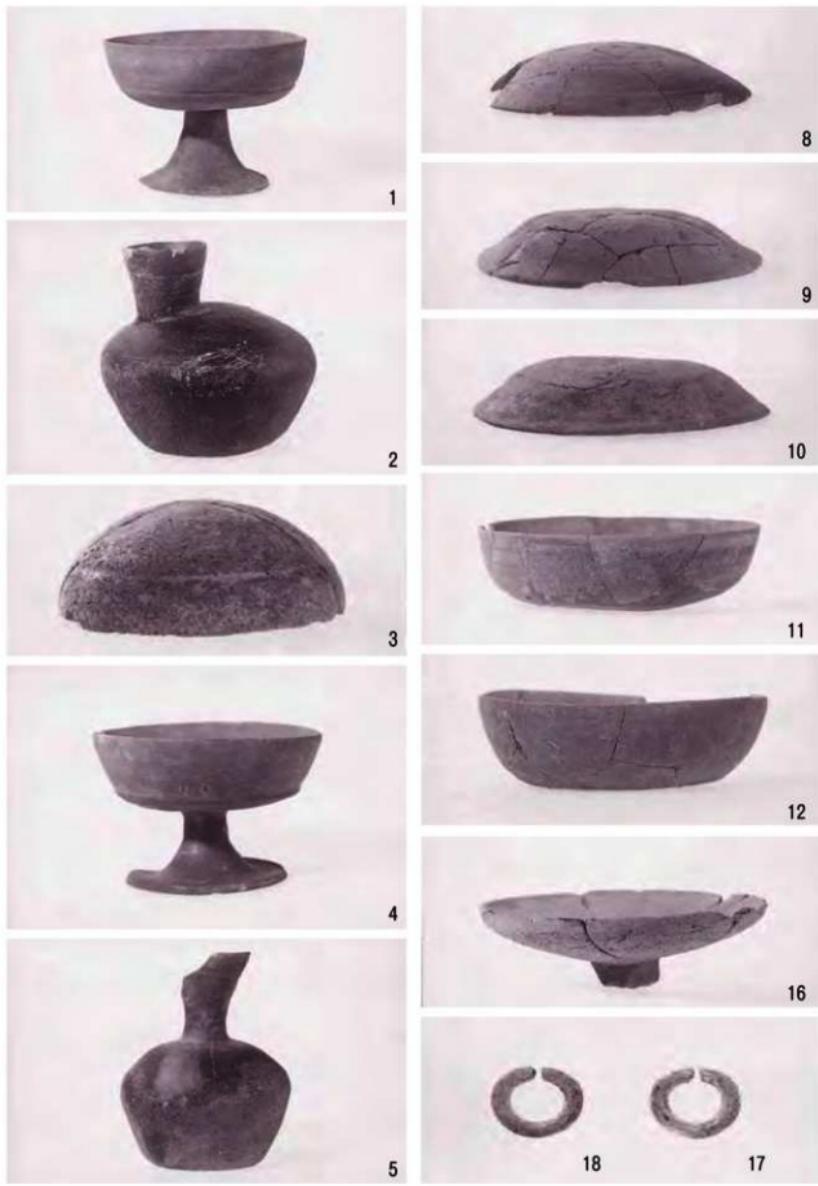
平原 2 号墳玄室奧壁



平原 2 号墳玄室
遺物出土狀況



平原 2 号墳 燒土坑



平原2号墳出土遺物



平原遺跡遠景
(西から平原2号墳を望む)



平原遺跡全景
(空中写真)



平原遺跡
遺物出土状況



1



2



3



4

平原遺跡出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひらばるにごうふん ひらばるいせき							
書名	平原2号墳 平原遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第231集							
編著者名	今井 涼子							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "		°' "		(m)
ひらばるにごうふん 平原2号墳	ふくおかけん みやわかしせりだ 福岡県宮若市 芦田376-1			33° 44' 49"	130° 38' 03"	2008.07.22 ~ 2008.11.11	200	県道室木下 有木若宮線 拡幅
ひらばるいせき 平原遺跡	ふくおかけん みやわかしせりだ 福岡県宮若市 芦田413-2、414-1、 415-3			33° 44' 44"	130° 37' 56"	2008.09.16 ~ 2008.11.25	380	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
平原2号墳	古墳	古墳時代	円墳・焼土坑	須恵器・土師器・耳環				
平原遺跡	集落跡	不明	ピット・湿抜き溝	陶磁器				

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 22	登録番号 3

平原 2 号墳
平原遺跡

福岡県文化財調査報告書
第231集

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園 7 - 7

印刷 築上印刷(有)
〒828-0043 福岡県豊前市大字岸井201番
TEL 0979-82-1301 FAX 0979-82-8109